

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



石川 守さん

昭和4年6月22日生まれ。  
宝来地区在住

## 幼少期の思い出 楽しい時間

**私**

は昭和4年6月に芽室町祥栄で、農家の三男として生まれました。幼少期は近くにあった祖父母の住む本家でよく遊んでいました。鶏小屋の糞に何時間も寝そべって、「コケッココー」の鳴き声と共に生まれた瞬間の卵に触れてみると柔らかいのです。空気に触れて殻が固くなることを知り、子ども心に感動したことを覚えていますが、小学校高等科を卒業する直前に長兄が召集され、家にはお腹に赤ん坊がいる兄嫁と体調を崩していた父が残り、否応なしに15歳の私を中心に、馬を使い30ヘクタールの農家仕事をやりました。

## 師範学校入学 戦後の混乱

**終**

戦になって戦地から兄が帰ってきたので、昭和21年、私は函館師範学校に進学しました。当時、学生たちは樺太や満州から引き揚げた人たちの消毒の手伝いをしていました。駅は行き場のない極限状態の人たちで溢れ、食べ物を取り出すと、瞬時に人が群がり奪い取られてしまふ。毎日、ベンチに餓死した遺体が横たわっている。本当に痛ましい光景でした。

寮では、ご飯を入れた桶に残る糊を指でなめ、腹の足しにしました。私はわずかでもみんなで分け合おうと、食べ物を目一杯背負って帰省しましたが、仲間内にも自分だけ満たされればいいと、背を向けて食べる人がいました。この函館での経験は、私の生き方に大きな影響を与えました。

**師**

範学校を卒業した私は昭和29年に帯広の北栄

## アイヌの子ども たちとの出会い

小学校へ赴任、3年後に45人のアイヌの子どもたちの生活指導の担当になりました。生活は厳しく、子どもたちは鉄を拾い、花を摘んで売ったお金で家計を助けていました。指導は学校内だけでなく、土日は家庭訪問して会館にみんなを集め、学んで遊びながら理解を深めていきました。アイヌ文化の伝承などで活躍している教え子がいて、時々手紙のやり取りをします。子どもたちが成長し、それぞれ一生懸命やってきたことが報われる時代が来てうれしいです。70代になった教え子たちと接する中で、アイヌ文化の継承に思いをはせています。

## 第二の人生は

宝来地区で

**宝**

来地区に定住して30年、新しい住宅地に合わせた地域づくりに取り組んできました。宝来神社100年の時、多くの人に神社で新年を迎えてほしいと工夫をこらしてお知らせしたところ、除夜の鐘を合図に振り返ると参道が初詣の人で一杯になっ

## 私の人生訓

**間**

ていた、地域づくりに参加する喜びを知った出来事でした。

もなく90歳になる自分の礎は、幼少期の祖父母と過ごした時間に作られたと思っっています。豆から豆腐ができることを学び、仏壇にあった経本の舍利礼文にある「円満と平等」その言葉が妙に心に響きました。やがて妻の寿子と結婚、平等で円満な家族みんなが和で繋がる家庭を作ろうと誓いました。函館での経験もあり、子どもを教育する中で「和」を大事にしなければならぬと思っます。「先生、うちの子どもはクズで」と言う親御さんがいますが、私は「冗談じゃない、個性だ」と返してきました。学力テストで人間の価値を判断するな。「人間に絶対クズはなし」これが私の人生訓です。



▲亡き妻の寿子さんが書いた「静和」の書